

上演 5

2023 年 7 月 30 日 5 校目

中部日本 ブロック (愛知県)

大同大学大同高等学校

「ヒッキー・カンクーントルネード」

第 4 7 回全国高等学校総合文化祭演劇部門

第 6 9 回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

北海道千歳高等学校 (北海道)

森山 愛梨

引きこもりやそれを取り巻く環境という大きなテーマについて、深く考えさせられる劇だった。

この劇は、10年間引きこもっている登美男と、そんな彼が外に出ようになっほしいと思う母、引きこもりを解消するために派遣される圭一、黒木、そして登美男の妹である綾の五人で物語が進んでいく。

緞帳が上がリ現れるセットは、中央にリビングがあり、袖に向かい黒いパネルが一直線に置かれている。中心へ照明を当てることで、その人たちの生きる場所や登場人物の視野が狭くなってしまっていることを表現しているように見えた。

綾が、「みんなだって同じところを歩き来している」と反論をするところに兄を想う強い気持ちが表れているのに対し、母親は、自分の息子を外に出し、引きこもりを解消することが一番正しい選択だと思っている。だが、自分の思っている正しさはその人にとって正しいとは限らない。ただ押し付けるのではなく、その人自身の正しさを尊重し大切にすることが重要なのではないかと考える委員もいた。母親は息子に外に出てもらえるように色々な手を尽くすが、それはあくまでも母の正しさであり、彼にとっての正しさと同一ではない。人のためを思うことが、どれだけ難しいことかを知ることができた。

最後に外で行われるプロレスに誘うシーンでは、こだわりから外へ出ることを怖がる兄へ「これから知ればいいでしょ」と笑顔を向け、綾は外へ駆け出す。登美男は少し迷いつつ、ゆっくり玄関のほうへ歩み始めるところで幕は下りる。

私たちがどれだけ生きやすいと思う環境を作っても、一定数生きづらいと感じる人はいる。それを示唆しているように感じる委員もいた。プロレスは、ヒーローが一度ヒールにやられてから、反撃を始めるのが通常である。だからきっと、登美男も自分の人生を少しづつ変えていくのだろうという、前に進む勇気と問いかけをくれた作品だった。

